

〈研究ノート〉

異郷・望郷・帰郷——戦後沖縄の本土移動の生活史（3）

岸 政 彦

0. はじめに

（1）（2）に引き続き、本稿でも戦後の本土移動者の生活史を再録する。調査については参考文献リストに挙げた文献を参照していただきたい。本稿では紙数の都合上、以下の一名のみの紹介にとどめる。

1. 宮城登紀子（48歳）

1954年読谷村M地区生まれ。6人兄弟姉妹の5番目。実家は農業と養豚を営む。父親は福岡の炭坑へ出稼ぎに行き、そこで2世の母親と出会った。1969年、両親の反対を押しきり、高校へは進学せず中学卒業と同時に集団就職で川崎の工場へ。4年間働きながら併設の定時制高校へ通う。卒業後しばらく東京にとどまり絵の勉強をしていたが、1973年Uターン。沖縄の紅型作りに携わる。

本土では職場と学校に恵まれ、都市的生活を十分楽しんだ。彼女は語りの中で、自然体で生きた本土での短い生活を、「楽しかった」と何度も語っている。実際、戦後の本土就職者たちの中で、これほど積極的に都市の生活を楽しんだ例は稀ではないだろうか。

語りの最後で、いかにも「沖縄的な語り」を引き出そうとする新聞記者に抵抗したことが語られている。このエピソードがわざわざ語られたのは、同じような語りを引き出そうとする私に対するある種のメッセージだったのかもしれない。たしかにここには直接的なノスタルジックな語りはみられないし、むしろそうした語りを拒否しているのである。だが彼女は、都市での生活を楽しんだあとで沖縄の家族のもとへと帰還した。「沖縄」

という抽象的な故郷よりも、家族という具体的な存在と共に暮らすことを選んだことが語られている。そしてUターン後から現在まで、沖縄のもっとも伝統的な工芸に携わっている。ここで恣意的な解釈は差し控えたい。ただ、彼女の物語もまた、都市での青春と沖縄への帰還の物語であることは確かである。聞き取りは2002年2月17日。

1-1. 移動前の生活

（生まれは）読谷ですね。1954年です。両親と、祖母と、兄弟6人……姉ふたり、兄ふたり、妹ですね。だいたい沖縄は一般的です。6人兄弟っていうのは。多い人は10人いました（笑）。だから私なんかの年代で、少ない人が4人ぐらい。兄弟で。だいたい、一般的に6人ですね。みなさん、貧乏の子たくさんで（笑）。姉が私より10才かな、11才上で、長女、一番上の姉ですね、第1子が長女なもんですから。それで妹が私より3つ下だから、（一番上と下で）プラス4、5ぐらいは違うんじゃないですかね。だいたい、あの、だから上の姉たちがもうほら、中学卒業して出てったりすると、もう下とはあんまり、ね。お家の中で（一緒に遊ぶ）、っていうのは、ないですよ。私は5番目ですね。姉と兄が上に2人ずつですので、5番目です。（上から）女、女、男、男、（本人、）妹。

（「農業でした？」）そうでした、はい。あの時はお米でしたね。お米とね、それから、養豚を少しと、さとうきびですね。お米の方は……さとうきびはうちは、米よりさとうきびの方が後でしたね。

家は普通じゃないですかね。大きい方でもないし。だいたいまあみんな、あのころのみんな、お米作って、養豚して、さとうきび作ったりして、だいたいまあそういう生活っていうのかな、経済的には。

私は田植えは好きで、水の中ばちゃばちゃ(笑)、好きで。稲刈りはね、あれははじかい(体がムズムズする)んですよ、米の方は。それが嫌でね。それはありましたね。で中学、私が中学の頃からですかね、養豚業が、今までいわゆるほら、沖縄の古い戦後の、ウーフル(豚小屋)っていうんですけど、ウーフルって1,2頭っていうのが、いわゆる今の鶏のゲージ飼いみたいな、こう養豚場を割と広くして。

あれ何畳ぐらいかな、10畳ぐらいの1部屋に、豚を10頭ぐらい入れてっていうので、この1つの棟に、その部屋が十ぐらいあるような、大きい……だいたい18,9ぐらいからだったですかね、ああいう(近代的な)養豚業が入ってきたのが。どっから入ってきたんでしょうね。ああいう飼い方っていうのは。アメリカですかね。そしてね、配合飼料で。今まではほら、あの、イモを煮て、つぶしてあげてたっていうのが、配合飼料が出てきて……飼いが変わって、それでシマ豚(土着の豚)が、あのなんていったかな、ヨークシャーだか、なんだか、私もはっきり覚えてないんですが。そういうのが入ってきて(シマ豚が消えていった)。だから私ほら、植民地だから、アメリカから来たのかなぐらいには思ってたけど。あんまりほら、興味もないし。

うちの実家、いわゆる普通の平家の家があって、メーヌヤ(倉)って言って、農具とか置いてあるところ。そののね、隅にトイレがあって、そこにいわゆる豚、2頭ぐらい飼ってたのは覚えてるんですよ。それがね、とにかく中学ぐらいで、ちょっとうちから少しだけ裏の方に畑があったところに、この豚小屋っていうのが

できて。

(「子どものときに、沖縄の伝統芸能には……」)

うちはね、だからあの、またその時分の親にもよるんだろうけど、両親とも戦後すぐ、いったん沖縄で生まれて、外に出て、戻ってきたあれだもんですからね、うちの母もまた向こうで生まれて戻ってきてるもんだから、伝統芸能っていうのとあんまり縁がなかったような気がしますね、うち自体で、ほらお父さんが三味線弾くとかね、そういうのはありませんでした。

うちの父は炭坑に行ってるんですよ。母は、母の両親が向こうで結婚して向こうで生まれて、父と結婚してここに来てるっていう。

(「じゃあそこで出会って?」)

だと思いますね。私もそこらへんは詳しくは聞いてないんで。だからうちの中そのもので伝統芸能みたいなものは、ちょっとほら、三味線弾くとかそういうのはなくて。

ただ部落ではほら、あの豊年祭とか、そういうのはありますよね。あの、旧(歴)の8月15日の……お盆とは関係ないんですよ。旧の8月15日ですよ。それに、三味線にあわせて踊ったりとかっていうのが……。でも、私中学までしかなくて、小学校のときなんていうのはほら、こんな夜の行事っていうのは、わざわざ見に行かないですよ。だからたぶん行った人もいると思うんですよ好きでね。でも私の場合は、出て見に行ったという記憶はあんまりないんですよ。

でね、小学校何年かのときの、お芝居があって、それに北島スミ子に来てたっていう記憶はあるのね。それだけはもう、はっきり覚えてるんですよ。それは、見に行ってるから記憶があるわけですよ。なんかのお芝居だったと思うんですよ、北島スミ子さんっていう、あの人。いま芝居やってますから。だから豊年祭っ

ていうのは、この四つ竹の踊りとかそういう、なんかちらちらと記憶はあるんですけども。そういうふうに、衣装見た記憶はあるんですけども、どういうふうなものっていうふうに、理解はしてないですよ、ね、もちろん。

たぶん(沖縄舞踊などの)習い事する余裕のある家っていうのはどこもないですからね。よっぽど……私の友だちでね、ピアノ習った人がいて、彼女はずいぶん妬まれたりして(笑)。

(「当時ピアノっていったらかなりハイカラな……」)

いやあもう、それはもうそうですよ。ずいぶんですよ。家にピアノがあって、習いに行くっていうのは大変なものです。それもね、今の琉大の、N先生。その方に習いに行くと。っていう感じがあったもんだから……。中々、今だったら猫も杓子もピアノ習いに行きますけど、あの頃はほんとにね、学校でひとりいるかいないかぐらい。だから昔は学芸会っていうのがあって、それになると必ずやっぱりどうしても目立つじゃないですか(笑)、そうするとやっぱりやっかむ人は出てきますよね。めったになかったですからそういうのは。だから、習い事するって、私も、うちの父が踊り、それを知ってる人ですよ、村うちで、ただ簡単に教えてくれる人がいて、やるかって、私聞かれたの。ううん、私ピアノやりたいって(言ったら)、どこにそんなもん買うカネがあるかって、一喝されたことがありますけど(笑)。

(「沖縄の踊りじゃなくて、ピアノの方がよかったんですね(笑)」)友だちがやってたもんだから……あの頃習い事とかそういうのは、とてもじゃないけど、なかったと思いますよ。

あとは情報としては、親子ラジオですね。親子ラジオっていうのがあったんですよ。有線ですかねあれ。今でいうと。あの時は親子ラジオとしか言わなかった。どこのうちもだから、柱の上にラジオがあって……部落でねえ、あれ何ていったんだろ。あっちは。なんかとにかくそ

ういうところがあって。で、スイッチをひねるとラジオからいろんなのが流れてくるって感じで。だいたいだから、うん、外からの情報っていうのは、そのぐらいだったんじゃないですかね。

電気が入ってきたのが、小学校の……そうなんですオリンピックの頃なんですよ。だから、山原はずいぶん遅いですよ。小学校5年のとき、オリンピックの頃から、まともに電気が……(「聖火が通ったんですね」)そうです、はい、通りました。でこぼこ道を(笑)。(「5年生生っていうと10才ぐらいまでは、」)ランプでした。(洗濯するにも)みんな手です。

(「お父さんは九州の炭坑は、割と長いこといらっしゃった?」)

よくそこらへんは聞いてはいないんですよ。わたしも。正確には。長いこといたと思います。(「福岡も多いんですかね、沖縄の方?」)と思いますよ、私の叔父がまだ向こうにいるし、いとこたちもいるんです。どうして行ったんでしょねえ、たぶんそこらへん、知り合いかなんかがいて行ったと思うんですけど。

ですからうちの母は、こっちに来るまでは沖縄の方言もわからなかったっていうんですよ。両親とも沖縄出身だけれども、本人は向こうで生まれて、戦後父と一緒にこっちに来てるもんだから。

(「家の中では、あんまり方言は使ってない?」)

はい、そうですね、方言も、祖母がいたんで、祖母は方言使って……あの頃はね、私たちとにかく小学校の頃は、共通語励行っていうのがありましてね。方言札まではなかったような気がする。ただあの、何ていうんだろ。この、毎週、なんか週番というのね、小学校の時いたような気がするんですよね。その時の、何か標語みたいなのですかね、共通語励行か何か、とにかくそれだけは覚えているんですよ。共通

語励行っていうのが。

（「友だち同士の会話っていうのは、あんまり方言は、」）

そんなには使ってなかったですね、はい。だから、使えることは使えますけど、こう方言で、こう文章喋るっていうのは、だいたい私たち世代ぐらいじゃないですかね。もう、だいたい標準語ですよ。あの、何ていうのかな、ちょっとした言葉、あの咄嗟に出る、ウチナーンチュってね、あのほら、（自分で自分を）ウチナーじゃないって言ってもね、つねったりするとね、この、「あいた」っていうのね、「あがつ」っていうんですよ。それで（咄嗟に出るウチナーグチで）わかるっていう（笑）。だからそういう感じの単語っていうのかな、そういうのは多分ウチナーグチ使ったと思うんですけど、それ意外は、あんまり使ってないはずですよ。

（「じゃあ、子どものときにまわりに沖縄文化っていうのは、当時はぜんぜんなかった？」）

ないです。だって共通語励行があるくらいだからもう、なかなかそこまでは、みんな……うん。

1-2. 集団就職

（「御自身は集団就職でどちらへ？」）

神奈川県川崎市の、トランジスタ工場です。川崎市……あそこ何区だったかな……これはトランジスタ工場で、ちょうどあれですよ、トランジスタ部品を作るの、盛んな時期で。

うちはね、父が私が小学校あがる前にちょっと病気で心臓わずらったもんだから、ちょっと大変な時期があって、生活保護受けてた時期があったみたいなんですよ。私あんまり記憶がはっきりしてなくて。

で、うちの長女が高校で……だから姉、長女は高校中退してるんですよ。高2だか、とにかく、そのぐらいで、中退。小学校で用務をしてました。あとで通信教育で本人受けて、やって

るんですよ。だからもう、次女も中卒で那覇に勤めに出て、長男次男も中学卒業して。で、次男からは、あの長男は不良で学校あんまり行かなかった（笑）っていう話で、とにかくあの、兄の、次男の場合は、うちの父がそのときはおうち帰ってきて畑もやってるし、私はもうその記憶はありますのでね、多分彼は高校進学なかった。私もこっちで高校行きたくないっていうことで、集団就職に行ったんですよ。だから経済的には、私の兄からは、まあ別に、いわゆる一般的な沖縄の……だったとは思うんですけどね。

（次女は）那覇に行ったということです。那覇に行って、それから戻ってきて、私が小学校のときは、もうすでに近くにね、教会があったんですよ。ええとね、あれはね、宣教師ですかねあれは。なんですかね、いちおう教会というのがあって、そこに……あの人たちは何をしてたんだろう……牧師ではなかったかも……そこのお手伝いを、うちの姉はしてたんですよ。牧場やってるという話は、私は聞いてたんですけど。牧場っていうふうに……まあどういうあれかわからないんですけどね。教会があって……今はもうそこないですけどね。

（長男は）中学卒業して、あのね、関西の、関西のとにかく、御近所の知り合いの人のところに就職したあとなんですよ。集団（就職）ではなかったと思います。うちのすぐ上の兄は集団就職であったと思うんですよ。それもあの、東京……私すぐ近くでした。ええとね、A区だったのかな。なんかね、旋盤っていうんですかね、それのとこに行ってたんですけど。集団就職だったと思います。ちょっと私ははっきり記憶してないんです。いちおう学校を通してだったと思うんで。

次男は私より2つ上で、私が1年のときに、すぐ上の兄は3年生でした。集団就職だったような気がするんですよ。学校の先生がうちにみえてたような気がするんで。集団就職の場合は

だいたいほら、学校通してやりますよね、それでだいたいあの……くわしい中身は私は知らないんですが、先生がそこにみえたということは、集団就職で行ってると思うんですよ。

長女次女はうちを出られなかったということはあると思いますね。下に(弟妹が)いるし、たぶん家計を助けてたはず、なんですよ。長女と次女はね。と、思います。たぶんだから、親は(息子は外に)出したかったか、それはわからないですよ。私もほら、反対押し切って出た方だから。うち、すぐ上の兄も、高校行っているの、嫌って行って行かなかったし、私も、行きなさいっていうの、嫌って行って自分で……。

(「ご長男が中学出られる頃には、親御さんも、おからだは、」)

そうです、はいはい。別に、高校行かせられない経済状態ではなかったわけだから。

(「親御さんは、高校進学して、家にいろと。」)

そうです、もう。いろいろもめまして(笑)。私は自分の意志で……要するに、いわゆる世間一般の人のいうあれですよ、まあ学校行って、それなりの高校卒業して、就職するなり、大学行って勉強したらいい就職ができるよみたいなね。何をおっしゃいますかという感じで(笑)。私は世の中が間違ってるて、親に食ってかかった(笑)。言いましたよ。

だって要するに、ちゃんと卒業しないと、仕事がないみたいな、とにかくまあ……やっぱり私は、うちにはいたくなかったし、沖縄にもいたくなかったし。だって勉強する意味もそのときはないし。友だちにみんな、あんたちなんぞ学校行くのって聞いてまわったわけ。ひとりだけ勉強好きっていう人がいた。(当時は)もう(沖縄でも)みんな高校行く頃ですよ。ほら、先生方も勉強しなさい、みたいな。69年です。就職したのは。敢えて……。

(「県内で働くことは考えなかったですか?」)

いいえ、沖縄にはいたくなかったですね……。だって高校に行く理由がまずないし。まあだいたい、そもそも学校があんまり好きじゃなかったし。だいたい中学の先生って、だいたい今でもそうだと思うんだけど、だいたい建て前が多いですよ。それもあつたし。やっぱりあの……(「学校でよく先生に反発してたりとか。」)まあ、それはよく。(「喧嘩したり、先生と? (笑)」)はい。

だから、とにかくシマから出たいですよ。沖縄から出るにはもう行くところ、あつちしかないじゃないですか(笑)。言葉が通じるとか、ほら。ましてや外国行くなんてことは頭にもちろんないですから。

(「なんでそんなに出了かったんですか、沖縄」)

なんていうんですかね、やっぱり、親元にいるのが嫌だし……やっぱりそこらへんでね。それで私はやっぱり、あの、米軍の基地だったんです。あれなんの基地だったのか、ちょっとよく……で、基地ありましたよ。けっこうほら、米兵がトラック乗って通るし。だから、あんまりああいう……。

だからやっぱり沖縄はアメリカの植民地っていうのは、ほんとに目に見えて、自分たち生活してますよね。(「そのへんも嫌でした?」)ですねえ、はい。

あのころはけっこうほら、復帰運動も盛んで……私なんか年代はあんまりやってないけど、たぶん、5つ6つ上ぐらいの人たちは高校のときにね、みんな B 52 反対のなんか(を首から)下げてたの私、記憶があるんですよ。ちょっとよくわからないんですけどね、なんか、B 52 がなんか、なんかありましたよね、B 52 が(墜落した)。それがあって、だから高校生はあのころねえ、多感な時期だから、多分そういう運動やったはずだけど、私なんかだから、その

手前だから、そこまではいかないけど。

あの頃はだから、いろいろ面白かったですよ。だから私も就職して、トランジスタ工場就職して、その時にね、面白いのがもう、うん、私が面白いと思ったのは、就職のね、パンフとかそういうのなんですよ。仕事に行くっていう体制じゃないですよ、パンフが。もうお花の教室はこうなってます、寮のね、(笑)もうとにかくほんとにそうなんですよ。私たちは何しに行くの？ トランジスタ工場のこの部品作って、これがどうなるとか、そういうのは一切なかったです。

だからはっきりいって、私行ったときに、仕事に対する不安は多かったんですよ。はじめてですよ、もう見たことのないところ行くもんだから。仕事できるのかなみたいな不安があったんですよ。ただまあ行って教えてくれたら、もうほんとに、顕微鏡ながめて、トランジスタの金のワイヤをつなぐっていう、あれなもんだから、すぐ覚えられましたけど。

うん、あとはほら、学校があるとか、そういうことで。それで私、横浜市のSだったかな……横浜市になるんですかね、そこにあったんですよ女子高が。戦時中作った学校とかいってたんですが、そこがあの、2交代だったんですよ、仕事。あの、早番が朝の5時半ぐらいからでしたかね。午後の2時に終わって、午後の人は午後の2時から夜の10時までっていう。だからその間に学校行けるようにしてあったんですよ。

だからあの、若い子集めるためにだからほら、お花の教室がこうなの、何だの、学校行けるよとか、そういう感じで、まあ行けるんだったらいいとか、どうせ時間あるんだし、ということで、私はそこに行っただけですよ。そこがだから、学校がだから2交代制みたいな、一応夜学にはなってるんですよ。夜学にはなってるんですけど、遅番の時は普通に朝行くわけですよ。

よね。

で、仕事がまた早番の時は、午後2時に仕事終わって、それからほら会社からスクールバスみたいにして、出すんですよ。それで、行って、4カ年いたんですけど。その夜学はねえ、もう何年かぐらいして、すぐ無くなってます。学校行く生徒いなかったみたいですね。あとはほら、中卒で来る生徒もなかなかいないし、多分だからその集団就職のその下りのとき(減少したとき)にはなくなってるんですよ。全日(制)はいま残ってますけど。

(「それは社員専用の学校？」)

そうですね。だからそういうふうに、たぶん組み込みやすかったんだと思います。私とH中学から3人就職したんですよ。あとね、NECに何人か行ったはずなんですよ。NECもね、近くにあったんですよ。川崎の近くに、あそこもうちょっと住所忘れたんですけどねえ、駅で2つとか3つとかいう感じで。そこも会社専用の、たぶんあったはずですよ。そういうあの、変則2交代の学校が。

(「仕事が決まるときっていうのは、卒業前にもう決まってるわけですか？」)

ええそうですね。だから私はもう卒業式にも出なかったです。年内には決まったような気がします。支度金もね、ずいぶんもらったような気がするんですよ。支度金というのをもらいました。

(「決め手はパンフレットですか？」) そうです。だったと思いますけど。私もどうして選んだんでしょう。あんまり記憶は……いやあ、でも、たぶん、東京に近い方がいいと思ったんじゃないかなと思うんですけどね。それでほら、NECに行った同級生もいるんで、だからどうしてここにしたのかちょっと私も……卒業式はですね、あの、3月下旬くらいだったと思うんですよ、通常は。で、あの、とにかく仕事ははじめが4月のいっぴだったと思うんで……そ

れまでに間に合わせるということもあったんだと思いますが。

それで卒業式は、私なんかはこう、繰り上げで、証書はもらったんですよ。(「就職される子だけ……」) そうです。はい。なんかね、卒業式の練習があったのかな、もうそれこそわざわざ先生たちが組み込んだのか、なんだかよく知らないんですよ。でも、その全体? のときに、同じ会社に就職する3人だけは、3人だけ、もらったと思います。

(「当時の本土のイメージはいかがでした?」)

イメージは、ああ空が真っ暗だなあっていう(笑)。だって、黒いじゃないですかスモッグで。うん。あの、やっぱり暗い感じですよ、沖縄から行くと。それでね、私が行った年に、4月に雪が降ったんですよ。3月末だったのかな。69年ですよ。だって就職したの69年で。

(那覇港までは)バスだったね。もうね、ちょっとね……記憶が、定かでないですね。どうやって行ったんでしょう。たぶんバスだと思います。あの頃、車っていうのもそんなにない時代ですから……先生方も乗用車っていうか、けっこうバス通勤の人も多かっただろうし。(見送りに) うち母が来たような記憶が、するんですけど。……学校の先生も来たような気がしますけどね……あの時たぶんほら、今の進路指導の先生じゃないんですけど、たぶん就職の時の、なんかそういう世話をやく先生がいたと思うんですよ。就職指導っていうか何ていうかわからないんですが。

大きい船で……何だったんだろあれは。みんなテープはって。(集団就職専用ではなくて) いろんな人がいました。たぶんだからほら、大学行くとか、なんかそういう方たちもいらしたんじゃないですかね。

(「やっぱり寂しかったですか、最初は」)

いえ、とてもうれしかったですよ。喜んで、

わーわーいって(笑)。

(「泣きながらとかじゃなくて(笑)?」)

いえいえ、そういうのはなかったですね(笑)。何を悲しむの、なんて。たぶん親は不安だったんじゃないですかね。でも私は、自分のあれは、負けないもんだから。うちの親が諦めて……そういうとこです(笑)。

それでね、行くときにね、飛行機だったのが、クレームがついて、鹿児島でおりた。鹿児島まで飛行機で行って、鹿児島から神奈川県入るまではバスで行きました……。なんか、そういうふうに聞きました。本当は、羽田に行きたかったみたいなんですけど。どういうクレームかしら。これは教師からの話ですから。あんたたちほんとは、羽田まで飛行機で行けたはずだけど、どういうクレームか知らないんだけどなんかほら、他は船だったような気がするんですよ。

違う……行くとき船で行って羽田から飛行機乗って……違う……そう! 鹿児島から飛行機で羽田でした。でね、船で……そう、船でした。行くときは。行くときは船で。(「奄美大島通っていくやつですか?」) はい、だったと思います。那覇港から、奄美大島通って、鹿児島でおりて、鹿児島から福岡までバスでした(笑)。バスで行って。そう。福岡から羽田まで飛行機だったんですねえ……そうですね、はい。

(「最初に、鹿児島。それが始めてですよ、本土に行った。」)

はいはい、始めてです。でね、今思い出した。その時、あのねえ、(那覇の) 港のねえ、底が見えたんですよ。きれいでした。あのときだって、ああいう大きい船乗るのも始めてだし、ああいう大きい港もはじめてだし。そこらへんのね、読谷の海で、海眺めるぐらいなのに……ほんとにおっきい船が接岸してくっついてても、海の底が見えるぐらいきれいだったです。覚えてます。それがほんとに今ねえ、どこも

汚いから……やっぱり変わったなあという気が……あのときはきれいですねほんとに。

鹿児島……船酔いして、船酔いしてとにかく鹿児島着いて、とにかくあの、頭がもうろうとした状態でバスに乗って……福岡に着いたのがとにかくねえ、とにかく羽田に着いたのがとにかく日が暮れてました。夕方、夕方っていうか、夜のたぶん……何時だったんでしょうねえ。たぶん1泊2日ぐらいだったと思います。

(「2日ぐらいかかって、朝ぐらいに鹿児島着いて、東京着いたのが夜……」)

はい、そうです。結局福岡までバスで……ずいぶん乗ったような気がしますけどねえ。5、6時間か、何時間か。とにかく、うん。もうずっとバスの中でぼーとしたような気がするんですけど。あれはたぶん学校バスを、会社が借りてたんじゃないですか、きっと。よくわからないんですけど。みんな同じ会社です、そうです。はい。港に着けば……(「鹿児島で、そこで振り分けを……」) ええ、ええ。

沖縄からのね、そしてあの、行った学校がT女子高等学校っていうんですけど、そのね、半分は沖縄出身でした、生徒の半分。伊江島から来た友だち、今もつきあいあるんですけど。伊江島から来た人とか、そういう。読谷の人も何人かいましたけどね。多かったです。だから鹿児島着いて、バスは、みんなそこ行きの、私たちほら、15の少女が乗って、福岡空港まで行ったはずですから。たぶんだから、港から一緒だったはずなんですよ。……だから、あの、那覇で、那覇港ですでもうたぶん会社の人々がまとめて船にのせて、だったと思うんですよ。

(「最初に羽田空港に着いてどうでした東京は。」)

もう夜だから……えらい空港って大きいなっていうのは……もう夜でしたねえ。でかいのも何も。あんまりそういう(印象はない)。ただ、

やけに明るいんですね、飛行機がぴかぴか、電気もいっぱいだし。ただ、そういう飛行場の感じは、飛行場ってこういう感じなのかなあっていうのは、ありましたけど。(羽田に着いたらすぐ) 会社のバスが迎えに来てましたね。

(「すごいですね、ぜんぶ決まってるっていうか、全部手はずが整って……」)

そうそう、もう、そうです。言われた通り乗って、そして寮に着いたんですよ。そしてね、あの頃、だから飛行機をとにかく少なからずとも乗ったのは、うちだけっていうふうに聞きました。ほら、めんどくさいし、那覇から羽田まで直接、やりたかったのかもしれないけど、他のところはそれはなかったはずですね。船だったような気がします。

(「うん、飛行機っていうのは初耳ですね。集団就職で。かなり優遇してたっていうか」)

たぶんそうだと思います。(「人手不足だったんですかね。パンフレットもきれいな……」) そうそう、だからもうとにかく、こういうことができるよ、みたいなね。寮もとてもきれいでしたし。だからとにかく、支度金もとにかく、なんか、何十ドルかもらったような気がします。支度金。10ドルかな、もう忘れちゃったね。それでなんか洋服買ったような記憶があるから。

着いて……ええとね、行ったときに、先輩と一緒にの部屋だったんですよ。4人から5人部屋で。先輩が2人いたのかな。2人いて、新しく2人だったのかな。なんかそういう感じで。

で私、覚えてるんですけど、最初に寝坊して(笑)、隣の部屋の国頭の人が、あの国頭のね、奥間じゃないわ、とにかく国頭から来た人たちがいて、彼女が隣の部屋で。彼女が起こしてくれたのを覚えてる。で、着いて、翌日、着いてほらとにかく、寮で夕飯食べて、部屋に行きますよね。部屋割りされてるんで。翌日はだから、みんなで……あのね、会社まで歩いて5分

くらいでしたかね。

〔「仕事はどうでしたか？」〕

顕微鏡をのぞいてですね、トランジスタの小さい部品に、ワイヤーをくっつけるんですよ。ほんとに、髪の毛より細い……何ミクロンっていったかな、ちょっと記憶にないんですけど。その金のワイヤーなんですよ。それを、この部品間を、こっちとこっちみたい感じで、私たちは理論的なことはわかんないから、こっちとこっちを、っていうふうに、班長さんがいて。その人に教わって……顕微鏡をのぞいて。(労働時間は)だいたい8時間に近かったと思います。昼休みもあるし。

あの時はそんなあれはなかったですね。肩こるとか、体調的なことは。今の方が肩こります(笑)。あれは器用っていうのではないじゃないですかね。あの、とにかく顕微鏡をのぞいて、こんなちっちゃいですよ、トランジスタ……それからこの、何ミクロンなんか、髪の毛より細い金のワイヤーを、こうなんか、ピンセットみたいな、あれ道が通ってるんだろうか、なんかとにかく先が動くような、針の先みたいなので、こうぽーんと、移してくっつけるというのかな。そういう感じで。どうやってやったんだろう。何をどうやって操作したんだろう。ちょっと記憶が、ないですけど。2交代で。

で、何日か春休みですよ、すぐ仕事の方が先で、しばらくして学校で……あの、いわゆる入りたい人は誰でも入れるっていう、テストとかそんなのも何にもなくて。面接はあったような気がしますけど。半分沖縄の方。女子高です。バスで、川崎で、そこはSっていうところだったんです。

それがね、この創立の意図が、創立者のお母さんが戦時中だけに、いわゆるこういう、何ていうのかな、女子の教育をしっかりしないと日本はいけないということで、なんか個人であちこちお金をかき集めて作ったという学校らしい

んですよ。だから、私たちはね。あとだから、全日制は普通にいるわけですよ、ご近所の子どもたちがほら。お母さんもここ来て……専用じゃない。私たちは2交代でそこに行っただけですよ。そこはもう何周年か立ってる学校なんですよ。全日制は今でも、だから全日制はあるんです。あります。

面白い学校でしたよ。何ていうのかな、(沖縄の中学校では)だいたい先生、建て前のことしか言わないから、私の中学の時の先生も、あんまりあれなんですけど。要するにほら、高校行かなきゃダメみたいな。じゃあ何で高校行くのっていったら、それはないじゃないですか。だからやっぱり、そうなるよね。

(その高校は)あの、割に自主的に、っていう感じはあったんですよ。だからある意味、面白い学校でしたね。あの、園芸の時間なんていうのが組み込まれてて、授業として園芸を、もう週に2時間ぐらい、校庭のそばに花壇があって、花壇の手入れですよ。私はもうぜんぜんそういうの知らなくて。

そしたらあの最初の授業のときに、園芸の先生が、何を植えたいとか……私はね、わからないから、ほら向こう(本土)に生えるものは……。そしたらね、みんな沖縄のもの書くじゃない? そしたら、こんなもの(ここに生えるわけない)ってね(笑)……。だから、花でもね、私は自分のわかる名前しかまだ書けないじゃないですか。そしたら、こういうのはこっちではできないみたいなね。それはありましたね。

いちおうほら、普通、学校行くと部活とかあるんだと思うけど、私たちは、なかなかそれが、時間がなくて……。でもまあ、学校が午後の時は、1時間、部活やろうってことで、なんか。まあ自由参加ですよ。それでいつきはあったと思います。私は何もしなかったんですけど。

ほらお部屋も一緒に……学校行く人は、結局部屋が一緒なんです。そうでないと時間が、仕事が遅番のときに、学校行く人はもうほら、7時に起きて準備して行かなきゃいけないですよ。他の人たちは寝てるっていうこともあるんで。（「じゃほんとに、家と職場と学校っていうのがずうっと同じ顔ぶれで？」）そうですね、はい。（「仲良かったですか？」）うん、と思いますけどね。

女子寮って面白かったですよ、追っかけがいるわけですよ、そしてね、私のおんなじ部屋の子がね、フォーリーブスの誰かのファンクラブとかね……面白いでしょ。だから女子寮ってね。いろんな人がいましたよとにかく。あのときちょうど整形流行りで整形したり（笑）。美容整形。目を2重にするとかね。とにかく女子寮というのはね、面白いところですよ。あの頃ファッションのあれでは、美容整形が流行って、それから眉をそり落とす、あの、なんていうの、平安時代の、あの化粧なのかな。一時期そういうものが流行った。で、あの頃から、ミニスカートはいて、ロングのコート着るという、だいたいそういう流行りの時代ですよ。

でね、あの、沖縄でね、今みたいな菓子パン？ あれがちょうど5セントだったんですよ。そしたらね、あっち行ったときに、18円から20円ぐらいでした。だいたい一緒ぐらいだったんじゃないですかね……。それが、とにかくいる間で、みるみる上がっていききましたよね。要するに、値段がね。なんかそういう感じがしましたね。うん。

（「特にそのとき沖縄が恋しいとか……」）
いやそれはないです。

（「ご家族とは頻繁に手紙とか？」）

ええ、手紙。電話はやらなかったです。電話はね、あのときはなかったです、うちは。沖縄はここらへん電話が入ったのは、かなり遅いはず。もともとほら、沖縄に電話が入ったの

は、遅いです。それで申し込みしてもずいぶん待たされたはずですよ。ずいぶん遅くですよ、電話が入ったのは。だいたい手紙ですね。

（家への仕送りは）やらなかったです。やってる人は、あんまりいなかったんじゃないかな。貯金にするか使うかで……そしてあの、その夜学行ってるときに、そのT（女子高校）の先生たちが、なんていうの、集団就職で来て、ほら夜学行って、だからイメージとして一生懸命っていう、あれがあったでしょ、貧しいながらも、ってね。でも、「あんたちはちっとも可哀想じゃない」って（笑）。

けっこうね、東北から来てる人でも、けっこう都会にあこがれて、みたいなね。だから中にはやっぱり、いろんな人がいたと思うんですけども。

（「わりとのんびりした……」）

たぶんそうだと思います。だから、たぶんもうちょっと上の人たちとは、また別だったのかもしれない気がするんですよ。あの、賃金の方も、休みの方も、あのときにもう週、ええと、月第1と第5土日休みでしたからね。たぶんそこらへんは。（パンフレットと実際と）ぜんぜん違うところとかはなかったです。

（「かなり大規模な工場でした？」）

そうです、はい。大規模ですよ。とにかくもう、何百人じゃきかないでしょ、大きい……トランジスタ工場で、工場の敷地に……同じ課に、百名以上いたんじゃないですか。だって2交代だから、私たちの課であって、そういう建物で5階建てでね、第1工場第2工場がおんなじ敷地内にあって……たぶん、とにかく、よくわからないんですけど。今考えたら……。

だから、その私たちの課に、事務所がね、事務職の方がいますよね。で私たちのほら、現場の工員がいますよね。その工員だけでも、百人ぐらいはいたはずだから……。

(「ずらーっと顕微鏡が並んでる?」) そうそう、そうです。だからこう、5、6人こう並んで、また5、6列やって、そしてまた向こうの通路があって、向こう側にはまたちょっと違う部品作るのがあって、っていう感じで。ちょっと記憶が……。

(寮は) 4、5名の単位でね、たぶんその同じ階に、50人はいたはずですよ。50人で、4階建て。そしたら、200人の、3棟ありましたからね、A、B、C。1部屋、ええとね、12畳でした。12畳で、だいたい……。でね、でももう私が4年目になると、だいたい平均、3人ぐらいたったんじゃないかな。減ってましたね。減ってました。畳の12畳で、押し入れが、一間の上下だったかな、もっと大きかったか……が、あって、それぞれまた個人のロッカーがあって、そしてそれぞれみんな、小さいタンスを買う人もいたし。……私はその時買った本棚を処分しようと思っていま外に出してますけど(笑)。

(「学校はどれくらいいました? 2部の方に生徒は」)

少ないですよ。ええとですよ、私たちよりひとつ先輩が第1期だったんです、夜学の。私たちが第2期で、2クラスでした。全日制の方も、ほんとにこじんまり。中等部がね、1クラスずつで40人いなかったはずですよ。高等部がだいたい2クラスずつだった、ほんとにこじんまりした学校で。わりと誰でも受け入れるってということで、東京で放校された人がここに来て……いろいろいましたよ。

面白い、学校自体は面白かったです。で、体育祭のときに、マスゲームが組み込まれてましてね。やっぱり、一致して何かを作るという、やっぱり私はこのマスゲームと園芸の時間が、やっぱり。

(「修学旅行とかはありました?」)

ええとですねえ、ありました。あれはねえ、自由参加ではあったんですよ。それで、万博行

きました。ええとね、あれは5月の連休です。あのときに会社、あのとにかくね、休みもかなりあったんですよ。そういう連休と、正月と、かなり連休もあって。なんかそのときに、希望者だけですね。希望者だけ。何人行ったかなあ。あと、京都の苔寺。京都ですよ苔寺。あれ、とてもいいイメージが……大阪の万博と……。

(「会社では、契約期間というものはなかった?」)

そうです。そしてね、あのときにね、布団を支給されるんですよ。そしてね、それがね、2年以上経過するとその布団はもらえるけど、2年未満だと返却しなきゃいけないかったと思います。ちょっとよく覚えてないんですけど。いちおう私はほら、4年近くいたんで。打ち直して(持って帰った)。

(高校は) 69年に(進学して)、72年に卒業です。4カ年でした。72年でした。復帰して、翌年73年の3月の卒業だったのかな。そうですね。

(「じゃあ、復帰は内地で。なにか印象ありますか?」)

ううん、印象といっても……あんまり。私はむこうですと新聞とって見てました。個人的に。朝日新聞とって読んでたんですが。……何なんでしょうね。たぶん、やっぱりなるべくしてなったみたいなね。

あのほら、復帰運動があって……私だからあのとき思ったのは、中学でも小学校でも日の丸振らされて、結局だから、私たちの世代は、「振らされた」わけですよ。自分の意志じゃないじゃないですか。あの、復帰運動のあれは。学校でなんかパレードがあるとほら、校門の外に立ってみんな、なるほどあだったのねえというのはね。ありますけど。

(「じゃわりと、日の丸は、大人からやらされたみたいな……」)

だから、後になって考えれば、そういうことですね。小学校中学校の時のああいう、復帰運動というのは。でもまあ、なるべくしてなるような。

（「パスポートは会社が管理？」）いえ、自分が持ってたと思いますけど……。あの、帰省は、休みのときほら、帰省するしないは自分の意志ですからね。私は翌年の夏に1週間ぐらいだったのかな、とにかく会社が休みのときに戻ってきました。えっとね、あのとき……。船で、うん、往復しました。……。帰りは飛行機だったのか、とにかく、一番最初だけ船だったと思います。それから、あとは、飛行機だったような気がしますね。

（「特に沖縄だからって嫌な思いをしたとか」）
私はないですね。そしてね、たぶん他はトラブル……。あの、私自分で言うのもなんですけど、適応能力は高いと思っててんですよ（笑）。なもんだから、同じお部屋の子が秋田の子で、そしてね、その秋田の彼女のクラスはね、半分以上が、彼女のクラスに半分以上、沖縄の子がいたはず。それでね、やっぱりね、クラスでなんか、私には言いにくそうに言うわけね、やっぱり先輩は違うっていうわけ。おんなじ沖縄でも、私がいっこ上だったんだけど、先輩は違って、彼女どうのこうの言うわけ。だからやっぱり、少なからず、沖縄出身と他の地方の人のトラブルはあったと思います。

だから私はわからないですよ。私は（トラブルの経験は）ないもんだから。そして顔つきもあんまり私ウチナーっぽくないわけね。東北出身って言われたこともありますから。今は黒いですけど、若かりしころはまだ……。みんなほら、目がぱっちりしてるのかな、沖縄の人は。2重まぶたで睫毛も長くて、ちょっと顔つきも……。やっぱりそこらへんは。でも私たちのときはそんなには、あの、沖縄の人だから英語しゃべれるでしょみたいなのはなかったです。それはなかったですね。

ただね、あのとき面白かったのは、トランジスタ工場の、私たちは第2工場だったんですよ。第2工場っていうのは5階建てのほんとに、ビルみたいな、工場自体がそうですからね。私は……。もう忘れてた自分で……。そのね、課長っていうのが事務職でこの事務所にいるわけね。で、あとほら、現場担当の、あれは、組長っていったのかなあ。で、組合の話しまして。

その、何年か前に、組合で、どうのこうの（争議）があつて。とにかくほら、ちょっと新入社員を集めて、組合活動にプレーキかけるような物言いをするわけ（笑）。たしかそういうのがありました。組合活動がどうのこうので、会社が危なかったような、ね。なんか知らないけど。あのとき第2組合あったのかな？ ちょっと、私たちだから、そういうのに入りもしないんだけど、とにかく。そういうふうな人もいたし。

それからやっぱり、いろいろですね。あのときに感じたのは、北海道から来た人がいてね、アイヌの人もいたんですよ。でね、このアイヌってね、私はわからないですよ。一緒に同じ年の北海道出身の、彼女は美唄町出身だったんだけど、おんなじ職場の先輩だったの。あの人アイヌよ、って言うわけ。で、それがいかにもほら、わかりますよね、人ってこの、ものの言い方で、どういう含みを持つてるのかね。だから、ああそうって、そこは終わったんですけど。

それからね、沓岐からも来てる人もいました。それから、五島列島ね。だいたいだから、そういう意味では、見てると、この、どちらかというかと貧しい地域の、あれかなっていうのが多かったですよ。沖縄の人もけっこういたし。そういう意味ではいろんな人がいるなあって……。

それで、やっぱり私が沖縄出身ということか

もしれないけど、共産党の……まあ赤いボールペンでびっしり (笑)、手紙をもらって、ぎょっとして (笑)。あの要するに、この共産党と一緒に入って活動しませんかっていう感じのことをね。それもね普通のボールペンならまだわかるんだけど、赤い字で書いてあるわけ。おんなじ職場の方ですよ。女の人ですよ。いくつか先輩なんですけど。5つ6つぐらい上だったんでしょね……。東北の方だったと思うんですが。だからたぶん、後で考えたら、やっぱり沖縄の人は狙われるのがあるんだろうなっていうのは、私はそういうふうにとりましたよ (笑)。だから、いろんな人がいたし……。

私も別にほら、それに対して返事するわけじゃないし。それであの、お話はずっとするし、職場の中での付き合いは、ずっとありましたけどね。でも結局ほら、学校行って、会社とのあれで……全然。

(給料も) よかったですよ。……貯めなかったですね。私はもらったものは使うもんですから (笑)。いくらだったんだろ? 覚えてないですよ。でも、何万円って感じだったはずですよまだ。十万単位ではなかったはずですよ。十万まで来ないけど、とにかく……だから、いくらだったかははっきりとは……だけど、なんにもしないじゃないですか、別にほら。食券買って、寮と会社でほら、食事して……。

ええとねえ…… (家賃は) なんにもなかった……タダみたいなもんだったと思いますよ。なんにもなかったような気がしますよ。だから、食券買って食事するとそんなに高くないですよ。ね。だいたいそなんなで……。

であの時は、金は自由になるもんですからね、お金。給料とおいて、カメラ買って、葉山なんか写真撮りにいって、あの葉山御用邸っていうのがね、帰ってきてわかりましたね。いつもね、これ何なんだろ (笑)、このでかいお屋敷なんなんだろって、思ってたんです

よ (笑)。葉山の海岸に写真撮りにいって。(沖縄に) 帰ってきてわかりましたよ私。あ、なるほど、あれ御用邸だったのねって。

(「なんかあれですね、青春ですね。」)

そうですね。いやほんとに青春ですよ。

(「味が合わんとかそんなんはありませんでした?」)

いや、私はそれがない……すぐ納豆も食べられました (笑)。今でも好きなんです。とにかく、何も合わないっていうのは何もなかったですね。もうほんとに青春ですよ……

(「H 中学から一緒に行った、あと2人、いまどうしてます?」)

ちょっと連絡とってないんでわからないんですけど、沖縄県内にいます。私より先に2人とも辞めました。辞めて、すぐ帰ってきたと思います。2人とも沖縄にいます。まあ、そこへんは適応能力の問題かもしれないです (笑)。わからないですけどね。やっぱり、食べ物合わないとか、いろんなこと、少なからずみんなあったと思いますよ。

(「会社辞めるときの理由は何でしたか?」)

えっとね、(会社に対しては) 一身上の都合です。だから、あの時に一応進学しようかなあっていうつもりがあったもんだから、一応辞めて、予備校行こうかなあっていうのもあったし。12月いっぱい辞めて、っていうあれはあったんですよ。……貯金は、少なからず……少しはあったんじゃないですかね。

でももう、記憶にないですよ。だから大学行くんだったら、うち父が金は出すよって言ったもんだから、たぶんその貯金してたので私予備校行ってたはずなんです。貯めようと思ったらずら貯まるんですけど。貯めなかったんでしょね、きっと。使おうというよりかは、たぶんだから……使ったんでしょねきっと……だから、あの、望遠 (レンズ) で使ったりして

ね、あの時。写真。写真撮ろうと思って（笑）、
だいたい今ほら、目悪くなったらカメラなんか
のぞきもしない、それ（当時買ったカメラは）
みんな人にあげただけど。

（休みになると）カメラ持って葉山に写真写
しにいったり、あとちょうどあのころ、ロック
が流行ってたでしょ、で、ディープパープルが
来たら武道館に行ったりとか。71、2年ぐら
いじゃないですか、たぶん。あのとき、友だちに
ね、ジャニス・ジョプリンの好きな人がいてさ
（笑）。見に行つて。ほいでね、今もその友だち
とは交際があるんですよ、ずっと続いているん
ですけど。

レオナルド・ダ・ヴィンチ展が西洋美術館で
あって、私モナリザの微笑み見たのは覚えてる
んだけど、誰と行ったかは忘れてたんですけど
……。だからあの時、よく上野は行きました。
西洋美術館とかそれから日展とか院展とか。そ
れからあの、国立美術館も近くにありますよ
ね。あそこであのほら、刀剣とかみんな、あれ
は博物館でしたっけ？ あそこも行きました
ね。えらい、こんなものがあるんだっていう感じ
で見ましたけど。上野の、よく遊びにいきま
したよ。

ひとりでです、だいたい。それからあの、踊
るバレエ、あれが好きだったもんだから……。あ
れ学割で買えたんですよチケットが。で、それ
買って、あれはね、新宿文化（会館）……。ど
っかそこらへんでやってたんですよ。それもよく
見に行きましたね。ほんとに青春ですよ。もう
金は自分で自由ですからね（笑）、働いて。金
はあるし。とにかく……。映画はあんまり観な
かったですね。観た覚えがあるのが、『戦争と平
和』と、それから『ひまわり』ぐらいだったか
な。写真展とか、どちらかという展示会、行
ったほうじゃないかな。で、ちょうどそのと
き、メキシコの壁画描くひと、なんだっけ、あ
の人の、どこでやってたかな……。銀座だったか
な……。メキシコの、壁画を描く人。シケーロ

ス？ なんか、そういうのに行ったりとか。

面白かったですよ、私、あそこにいて。いろ
いろ、あちこち行つたし。それでね、あのバレ
エに憧れたのは、とにかく小学校の時はほら、
マンガぐらいしかじゃない。ちょうどね、
私なんか小学校の年代、森下洋子が出てきた年
代なんですよ。あの人がバレエの、マンガの表
紙を、こうチュチュを着て飾った、そしたらな
んか応募すると、トゥシューズがもらえるつて
（笑）、応募にせつせと、沖縄からバカみたいに
（笑）。当たるわけじゃないじゃないですか（笑）。
とても、その記憶があつて。今でもバレエは好
きですけどね、観るのは。だから東京ではそれ
も観て。

だからそういう意味で、東京はいろんなもの
が……。いいものが。そういう意味では。だか
ら、どうせ那覇に住むんだつたら、こんな汚い
ところ住むより東京の方がいいんじゃないのつ
て、私友だちに言ったりしたんだけど（笑）
……。

面白いといえば面白いですよ東京は。そし
てね、あの青山の、コシノジュンコのブティッ
クに、友だちと行って、その帰りに、機動隊
が、なんかあった時で、（検問で）袋の中、見
られましたよ、青山歩いてて。それで、見られ
たの。

それからね、川崎駅の、結局ほら、ジュラル
ミンのあの機動隊。あれも、川崎駅でもあつ
た。とにかく、あの時代、いろんなものがあり
ましたよ。あんなのみんなはじめて見るもんだ
から。それからほら、川崎のね、駅の地下の通
りのとこで、傷痍軍人つていうの、あの人た
ちがなんかアコーディオンとか弾いて、ああいう
のもいたし。それから私……。なんか、だから自
分が目にするものですよ、はじめてね。それか
らあの、あの朝鮮学校の制服が私、よくわから
なくて、あれきれいなもんだから、きれいなあ
れねつていって、ほら、他の本土から来た子

に、変な顔された？ うん。そういうのがとても記憶に……。

（「彼氏ができたとか、そういうことはないですか？」）

それもなかったし、あんまりそういうの興味もないから。いや友だちで早いのはほら、もう卒業まですぐ結婚した人もいるし。彼女は北海道の人でした。北海道のSさんという人で。もう卒業前だったから、もうあんた学校辞めないで、ほら、学校だけは卒業しなさいよみたいな感じで彼女のアパートに行った覚えがあるもんだから。卒業をまですに辞めちゃって結婚したもんだから、何もほら、結婚したからって辞めることはないじゃないですか。だから、学校だけは、もう卒業目の前なのに……学校は来たらっていう……職場は辞めたのかな……ちょっともうよく覚えてない……たぶんおんなじ職場の男性だったような気がするから。ちょっとよくわからないんですけど。

（「当時、沖縄出身者のサークルがいくつかあったと思いますけど……」）

たぶんひょっとしたらだから、その職場に誰かいてる人いたかもしれないけど……声はかからなかったですね。それとも、声がかかったけど、私が行かなかったのか……でも、かけられた覚えもあんまり……。

だって、他に面白いこといっぱいあるのに、なぜわざわざ沖縄の人と（笑）、つるむこともないと思わないですか（笑）。

私はいい思いしましたよ、だから。うん。みんながほら、たぶん高校卒業して就職なり進学なりした時点で経験したものを、前取りしてやってるじゃないですか。

1-3. Uターン、紅型の世界へ

ええとね、72年の12月いっぱい会社を辞めて、東京にいとこがいたんでそこにちょっと、世話になって。（東京のいとこの家から）

学校は通って、いちおう3月に卒業したんですけど。いちおう（大学に）進学しようかなあって考えてたんですけどね。一番迷ってる時期でしたね。（沖縄に）戻ってきたのが73年の9月に引き上げてきましたからね。

だから進学しようかなと思って、私、絵描きたいなあとと思って、絵描きたいっていうか、多分いろいろやりたかったんだと……まあ勉強なんかね、本読めばなんとでもなるっていうふうに思ったもんだから。

（絵はもともと）ちょっとだけは描いてました。ここ（沖縄）ではやってなくて、会社にね、行ったときに、ちょうど同じお部屋の子が1期後輩で入ってきて、秋田の子がいて、そしてもうひとりおんなじクラスの子、今でも付き合いはあるんですけど、新潟の人がいて、3人。近くにね、絵画教室があって、そこに行ってたんですよ。だからちょっとだけはやってて。

それで、自分ができない、好きだけどできない、絵を描いてみたいなのがあるって。ええとね、あそこはね、自由が丘にね、絵画教室っていうより予備校があるんですよ。要するに芸大めざしてる人のね、そこに半年ばかり行ってたんですよ。結局、でもやっててやっぱこれも違うなあっていう。

それはなんとなくというか……やっぱりもうほら、ここで何もするのがないと、もう帰るとこはやっぱり自分の実家しかない。うん。目標……ええと、だいたい目標があったわけではないですから、何も。何ていうのかな、とりあえずほら、高校卒業して、別にこの仕事だっけと続けていくつもりはないじゃないですか。その、仕事ずっと続けていくつもりもないし。

さりとてほら、何かやりたいという目標があるわけでもないし。ただまあ、大学行ってもいいかなと思ったけど勉強なんか本読んだらなんともかなるだろうと思うし、まあ絵描くのは好き

だったから、まあ自分のほら、できないことやってみようかなあっていうのがあって行ったんですけど。やっぱり違うような気がしたのね。

で、結局ほら、そこでやることないし、どうしようっていうふうに迷いもあるし……やっぱりもう、そしたらほら、もう帰るとこは、ねえ、自分の実家しかないなあっていうのがありますよね。

(「親御さんから帰ってこいっていうのは?」)

それはなかったです。ただ大学行くんだったら金は出すということで。それで予備校通ったわけですよ。(「いい親御さんですよねえ……」)でしょうね……私、今でも、タダは親だけだと思ってますから(笑)。タダは……それ以外タダはないですから……。

だから私は、もう何をするかなって悩んでるときに、結局ほらもう帰るところがないわけですから。ねえ。で、実家に戻ってきて、さあ、さりとてどうしようかなあって悩んで……。

まあ、たぶん生きている原点はね、衣食住だろうから、それに関するのやりたいなと思って、いちおう農業しようかなあと思ったんですけど、農業の辛いとかいっぱいみてるから、んなもんやってられないと思って。それじゃあ、メシ食うお椀でも作るのもいいのかもしれないと思って、壺屋行っただけです。……壺屋に行っただけじゃなくてね、あのときね、素焼きのね、展示会してた、もうそこの窯はつぶれたみたいだけど、ちょうどたまたま前に行ったときに展示会してて、いったん戻ってきて、電話かけて、やりたいって言ったら、断られたんです(笑)。

(「なんで断られたんですか?」)

ええとね、女性ということと……あの、たぶんあの頃は女性もそんなにいなかったはずなんです。ええとね、それがね、壺屋焼きではなかったのね。素焼きのね、なんていったか、名前も忘れちゃったけど。琉球……何だったんだろ。

とにかく素焼きのね、展示やってて。それで、とにかく電話して、断られて、さあまたさりとてどうしようかっていうときに、やっぱり農業はちょっとねえ、金にもならん仕事だしと思って、やっぱりやりたくないわというのがあったもんだから。

で、沖縄の方は、あれ何だったんですかね、『沖縄の文化』でしたっけ? 何か出てましたよね、創刊号から4,5(号)ぐらいまで。そんなにたくさんは出てない……それで、紅型の記事をちょっと読んだのと。まあ、それでほら、私ずっと趣味っていうのが読書と手芸なんです。中学のときも友だちと手芸してて、お裁縫したりとか、それはずっと好きで、洋服とか自分で縫ってたりしたもんだから。まあ、布もいいかな、と。

まあ、まずは行ってみようかしらあと思って。で、うちの父に、一緒にほら、ひとりで行くのが不安だから。大人もいないとダメだろうからって……。

そのとき19です。帰ってきてじきですからね。その年の9月ですから。73年。で、一緒に付いてってくれて言ったら、8月でしたかね、夏休みにいったん戻ってきたんですよ、要するに予備校夏休みがあったはずだから。そのときにどうしようか悩んでたから。それで、(紅型の工房と一緒に)行ったら、(親は)うーむって言いながら動かないわけ、やっぱりなんでこんなものをするというのがあるもんだからね。こんなものやったってほら、しょうがない、目悪くするぞみたいな感じで。あの年代はまだほら、その、自分の親が織物してた大変さを見てるから。

私はそんなもん関係ないから。それでまあ、それだったらいかなあというのもあったもんだから。行って。……やっぱり、何ていうのかな、直接的な仕事(がしたい)っていうのかな、この衣食住に関するね、それがあったもん

だから。それで、行ったんですけど。だから、それでその時はもう最初に下見みたいな感じで行って。いったん東京戻ってやっぱり引き上げようって言って戻ってきて、でまたひとりで行ったんですよ。仕事したいっていうことで。で、親も付いてってこないもんだから、しょうがないからひとりで行って。最初は夏休み帰ってきたときは、友だちとそのお友だちの彼が車持ってたもんだから、それで一緒に連れてってもらって。東京、いっぺん引き上げてきて、でその後またひとりで、まあ就職活動というかな。仕事したいっていうことで。行って。で、その年の10月から仕事始めましたね。73年の10月から沖縄で。

だから私は自分の同年とは同年でないですよ、話してて。ズレてるんですよ、動きがね。みんな普通にここで高校卒業して、それから就職したり進学したり、なもんだから、ちょっとズレてますね。それでほら、ぱっと戻ってきて、あんたあんな田舎で何してるのって言われるし。現在もそうですけど。だからその間にいつときほら、首里にいった時期があるもんですから。ちょっと、間が空いてるわけなんです。もう戻って3年目ですね。工房で。織物の、はじめて今まではもう、継続的に割とやってると思う、30年近くなるわけです。

今いないんです。要するに年寄りはどうも亡くなっていきますよね。あと後継者が……その人の後継者っていうのはいないわけですから。後継者が育たないから、多分ね、重要無形文化財に指定されたんでしょうけど。だから、ちょうど、ちょうどその際（きわ）ですよ。私が行ったのは。

だからそこで7カ年半やって、それから伝統工芸指導所っていうところがあるんです。あのときはね、個人の工房で、うまーく部落が回ってたんですよ。部落のね、作業の内容というのかな。私たちはもう染め子として1日8時間やってるんですよ。1日8時間、工房にあの

とき5、6人いたんですけど。それがうまーく成り立ってた。

日雇いの日当と同じ賃金で働いてたんですよ。そうするとおばさんたちは、部落の行事がある、それこそ学校の行事があって休まなきゃいけないと、それだけ生活大変ですよ、だからね、日曜出勤してました。だから私、私なんか日曜出勤やったのね、ボーナスもなかったのよ、って言うんですけどね。日給月給でやって。たぶん大変な時期ではあったと思うんですけどねみんな。それで日給月給でやって、だから日曜日も関係なくやって、とにかくずっと、私がいる間はずっと7カ年半はそれが続いて。

（「よく話に聞くのは、集団就職なり単身就職なりで、本土に行って、本土で沖縄に目覚めて帰るっていうのが多いんですが」）

いえいえ、私はそういうことないですね。

だからむこうでね、社会科の授業時間、社会科の先生が、イザイホーのね、あれ見せたんですよ。で私、あれは何だろうと思って、確かに記憶には残ってるわけ。向こうですよ、社会科の時間に。会社にいるころ、T女子高等学校に、社会科の先生がたぶんだから、そういうふうなあれがあったのかな……なんかあの、スライドで。

私はね、これ何だろうって、ぜんぜんわからないじゃないですか、沖縄にいて、そんな見たこともないし。ふうんと思って、質問も何もしないですよ、ただ記憶にはあって、帰ってきて、あああれはイザイホーだったんだっていうのが。

だから、私は別に沖縄とかなんとかいう意識はぜんぜんないんですよ。要するに、何も……だから、私いつも自分のことしか目に見えないからっていうんだけど、自分のことを考えてやっただけのことであって、何も。だからとにかく、自分はどこにいても適応高いと私は思って

ます（笑）。別に向こう（内地）に住んでもいい……たまたまだから、生まれたところが沖縄で、帰るところは自分の親のところしかないじゃないですか。だから親はタダですよ。だから、たまたま……それだけの話だから。どうしてやってるのって聞かれても、困るのよね私。

（「よく聞かれます？」）

いや、聞かれるんですよ、それがね（笑）。なんでって私は思うんだけど……別に大して何もね。

ええとね、（若い）ときね、（マスコミの取材を）受けたような記憶が……あの人は面白かった……ええとね、あの NHK のね、あの有名なプロデューサーが、海洋博のときにね、来たのよ……ええとほら、金城……何だったかな、亡くなった方。あの、鉄腕アトムじゃなくてほら、ゴジラだった？

（「ウルトラマンの金城哲夫？」）

ウルトラマンの、うん。あの人がね、海洋博当時帰ってきて、海洋博かなんかのどっかのシフトしてたはず。それで、NHK のプロデューサー、あのね、奥さんが何とかエミさんって、衣装デザインしてる人ですよ。

（「ワダエミ？」）

ああ、そうそう。その人の旦那さんが来て、なんか撮影していったんですよ。私はそんな海洋博なんか、やらん方がいいと思ってたから、（そう答えたら）海洋博反対のおねえちゃんバイバイって言って（取材班が）帰ってったわよ。なんかの撮影でね。（紅型の）工房の撮影ですよ。私の取材じゃなくて。

（「海洋博反対だったんですか？」）

だってあんなの意味がないじゃないですか（笑）。私はもともとあんまり、いやあ（大阪）万博は行きましたけれどもね。どんなもんかなと思って行ったけど。私並ぶの嫌いなもんだから、みんなね、アメリカ館の、隕石でした、あんなの並んで見るもんじゃないしと思ってたから。並ぶの嫌いだから……で、「見てきた？」

って（言われて）、「見なかった」って。

あんまり、だから、人は多かったし、太陽の塔で友だちを写した写真をいま残ってるんだけど。なんていうか、私はだから、あの時行ったのは、苔寺がとても印象深いんですよ。お寺で住むのもいいかもしれないねえと思ったんですけどね。

（「冬寒いですよ（笑）。あ、本土で冬寒いなあとかありました？」）

いや、寒いのは寒いんですけども、私は、沖縄にいと冬の方が好きです。沖縄の夏より冬の方が好きだから……あんまり、うん。

一度ね、（沖縄）タイムスの取材の人来て、帰ったはず。だって、聞くことがね、なんていうか、もうちょっと、私は返事に困るのね。あの、なんていうの、織物の奥を極める……奥を極めるなんて、何を聞けばね、もうちょっとね……。だから私あのときね、いや別に労働力売ってるんですよって（笑）。だって、現実に私は働いて、お給料もらってるわけだから……うん。労働力売って賃金もらって、そういう関係じゃないですか。私あんまり、言ったんですよ、あんまりほら……ぜんぜんほら、返答に困ることと言われるもんだから、私がそういう返事したら、もうたぶんダメだと思ったんでしょうね、帰りましたよ。

（その記者は）沖縄の方です。えっともう、あの頃で 50 近かったんじゃないですか。ひょっとして。よくほら、あんまり人の年齢も言い当てられないからわからないんですけども。たぶん、だからね、私としては、もうこういう質問受けてね、なんていうの、やっぱりうさん臭いというか、何を演出したいの？ っていうふうには私には受け取れないですからね。もうあんまり……。

だから私も、だからその就職する時も、親と喧嘩したときに、今時分学校出てなければね、安い賃金の仕事しかないよみたいなね。就職も

できないよみたいな。散々、私からすれば嫌味ですよね。高校行かないで就職できないわけないじゃないですか。できないよって(言われると)、そんなの世の中が悪いんでしょって言って。

別に……ただ、今考えたらほら、自分が本音でしか生きていないから、人の建て前はたぶん見抜く力があるんだらうなっていうふうに、今だったらわかります。あの頃は嫌ってという印象しかないですね、その教師に対しても、要するに嘘っぱいじゃないですか。

(「その、タイムズの記者が言っていたことも、」)

そうそう。あの、本気としてはとれないですよ。だからたぶん、自分は建て前では生きていかないし、その本音の部分でしか生きていけないから、それからするとああいうふうに。就職するときも、だから中学2年のときの先生、どうして就職するのって、いろいろ言われたわけね。こっちこうこう行ってほら、勉強してどうのこうのみたいな感じで。だからみんなそこは言うんだけど、何のために、どうしてって聞けば、誰も返事くれないじゃないですか。

だからやっぱり、あの時嘘っぱいなあっていうふうに思ったんじゃないですかね。それはありましたね。だから私同級生に、勉強好きなのって、ほんとにみんなに聞いてまわって。なんで進学するのって。だからみんな、いやみんなが行くからとかね。やっぱり、結局勉強しないとほら、就職が……いや、あの、はっきり言うと私、あんまり先のことは考えないタイプなの

かもしれない。だから、これ行かなければ就職できないとか、ちょっと違うような気がするんですよ。

文献

- 岸政彦 2001「自己言及と差別——高度成長期における沖縄人の本土移動体験」『人権問題研究』No.1 大阪市立大学人権問題研究センター
- 2004 a「語り・差異・構造——沖縄生活史研究における『繋留点』」『人権問題研究』No.4 大阪市立大学人権問題研究センター
- 2004 b「戦後沖縄の労働力流出と経済的要因——「過剰移動」論へのアプローチ」『都市文化研究』No.3 大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター
- 2008 a「沖縄から来た少年——「民族的経験」についての試論——」『龍谷大学社会学部紀要』第32号 龍谷大学社会学学会
- 2008 b「アイデンティティとネットワーク——ある沖縄人女性の生活史と文化実践から——」『人権問題研究』No.8 大阪市立大学人権問題研究センター
- 2008 c「語りの余剰と生活史」『市大社会学』No.9 大阪市立大学社会学研究会
- 2009「ハビトゥスとアイデンティティ——非対称性の理論への試み——」『龍谷大学社会学部紀要』第34号 龍谷大学社会学学会
- 2010「過剰移動——戦後沖縄の労働力移動における政治的要因——」『龍谷大学社会学部紀要』第36号 龍谷大学社会学学会
- 2011 a「異郷・望郷・帰郷——戦後沖縄の本土移動の生活史」(研究ノート)『龍谷大学社会学部紀要』第38号 龍谷大学社会学部学会
- 2011 b「異郷・望郷・帰郷——戦後沖縄の本土移動の生活史(2)」(研究ノート)『龍谷大学社会学部紀要』第39号 龍谷大学社会学部学会